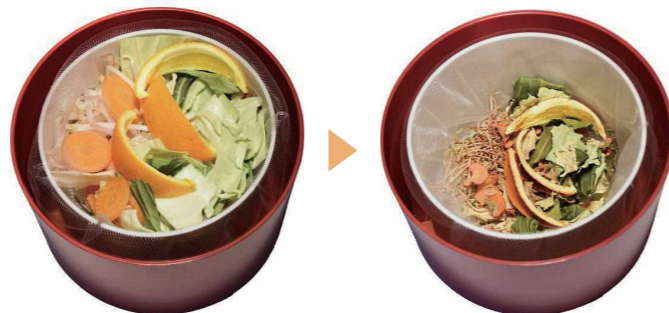




パリパリキューブライトアルファ



乾燥前

9時間後



(左から) 藤田さん、島憲吾社長、開発研究チームの来見さん



挑戦する かがわの 41 ものづくり企業

臭いやコバエ、雑菌、腐敗…衛生面でさまざまなストレスを感じがちな家庭の生ごみ処理に、独自の技術で救いの手を差し伸べる、香川のものづくり企業を紹介します。

島産業株式会社
 (住所) 観音寺市中田井町1番地
 (創業) 1952年
 ☎0875-63-4111
<https://www.shimasangyo.co.jp/>



独自の温風乾燥技術で 家庭の生ごみ処理を革新

乾燥させれば扱いやすい
技術が全国的にヒット

コンパクトで静音性が高く、臭いも漏れない家庭用生ごみ処理機「パリパリキューブ」。メディアやSNSで注目されて全国的なヒットとなったこの商品を生み出したのが、観音寺市に本社を置く島産業です。

本業は官公庁向けごみ処理施設の受注製造ですが、代表取締役の島憲吾さんは「焼却場で生ごみを燃やす様子を見ると、水分が多くて水を燃やしているようなもの。水を含んでいると重たくて運搬の燃料コストもかさみますが、乾燥させれば扱いやすく環境にもやさしいごみ処理

が可能なはず」と、パリパリキューブ開発のきっかけを振り返ります。

本格的な開発は2009年にスタート。紆余曲折の末、バスケットにごみを入れて温風乾燥させる方法を採用し、抗菌・耐熱性に優れ強度の高いエンジニアリングプラスチックを使ってコストダウンを図っています。生ごみを入れて起動すると、4〜9時間で枯葉のようにパリパリの状態に。乾燥度合いを自動で見極め停止する独自技術のPシステムを搭載しています。腐敗やコバエ、汁だれなどを防ぎ、重量は約5分の1に減り、乾燥後は有機質肥料としても使えます。破碎などをしないため、生ごみ以外のものが混じっていても支障はなく、

事前に分別する必要もありません。本体が傾くと自動的に停止するなど安全性にも配慮しています。

内部を負圧にしたことも技術の一つ。「内側の方が圧が低いので、臭いが外に漏れません。キッチンで調理家電の隣に置いて使っているお客さまもいらつしゃいますよ」。パリパリキューブが取得している特許の請求項は国際特許を含め、35項目以上あり、島さんは「遊び心を生かして楽しみながら作っている一品です」と力を込めます。

デザイン性も高評価

パリパリキューブの完成は2013年。改良を重ね、おしゃれで乾燥にも優れ、コンパクトな新製品「パリパリキューブ」も20年に発売しました。デザインやプロモーションもすべて社内チームが手掛けています。

自信作として送り出したパリパリキューブの最初期モデルは、思うように売れ行きが伸びなかったそう。店頭で目を引くよう「パリパリ」の名前にちなんでフランス国旗のトリコロールカラーを採用したことで、少しずつ販売数が増えてきました。「国内のデザイン賞に応募したら『色が悪い』と酷評されました。悔しさをばねに、いっそ世界3大デザイン賞を目指

そうと奮起して『江戸の敵は独逸で討つ』を合言葉にみんなで頑張りました」と笑う島さん。合言葉通り、20年最新モデルの「パリパリキューブ」はドイツでデザイン界のオスカー賞である「iFデザイン賞」「レッド・ドット・デザイン賞」のダブル受賞を皮切りに、最高峰である「ジヤーマンデザインアワード2021」特別賞も受賞。色が悪いと言われたトリコロールカラーのパリパリキューブは今では同社の主力商品となっています。観音寺市ではふるさと納税返礼品にも使われており、売れています。

社は「TRY」。「成功するまでは、失敗しても諦めない心が大切だ」と島さん。売上目標などは定めず、社員一人一人が自分なりのテーマを持って、自分から発案、発信していく姿勢を重視しています。「地方でも光るブランドはきっとあるはず。また、商品だけでなく自社自身のブランディングを、私たち全員でやろうとしているんです」。

パリパリキューブシリーズの国内ヒットを受けて、静かに海外展開も視野に入れていくという島さん。さらなる改良のアイデアもあり、まだまだ快進撃は続きそうです。

問い合わせ先
 (公財)かがわ産業支援財団 取引支援課
 ☎087-868-9904